

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009 ～ 2012

課題番号：21320069

研究課題名（和文）

20世紀における多様なマイノリティ状況の解明と共生言説の検討

研究課題名（英文） Minority Situations and the Discourse of Symbiosis in the 20th Century

研究代表者

田所 光男 (TADOKORO MITSUO)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：40179734

研究成果の概要（和文）：通常はそれぞれ別々の分野の研究対象となる、エスニック・マイノリティと社会的マイノリティ、さらにまた芸術的マイノリティと一つの同じ視野に収めることで、マイノリティに関する新たな総合学、「比較マイノリティ学」を構築することを目指した。それにより、マイノリティ概念の核心を、数量的な次元から価値的な次元へと転回することの必要性とその重要な波及効果を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We attempted to develop a new, synthetic discipline called "comparative minoritology". This was done primarily by viewing not only ethnic minorities but also social or artistic minorities, that is, groups that are usually relegated to separate scientific branches, into a single field of perspective. Such a shift brings to light the necessity and grave consequences of a revolution in the concept of minority itself, a revolution which consists in transposing this notion's axis onto the plane of a value hierarchy that relegates the minority to an inferior position.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	2,300,000	690,000	2,990,000
総計	7,300,000	2,190,000	9,490,000

研究分野：比較文化

科研費の分科・細目：文学、文学一般・比較文学論

キーワード：マイノリティ、共生

1. 研究開始当初の背景

本共同研究は、これまでに行った複数の共同研究の展開として企画された。基盤となった先行の研究は、まず平成14-15年度の基盤研究(C)「20世紀ディアスポラ・ユダヤ人のアイデンティティ」である。これは、主に西欧諸国におけるユダヤ人マイノリティをめぐる問題を考察し、続く、平成16-17年度

の基盤研究(C)「20世紀ポピュラー音楽の言葉：その文学的および社会的文脈の解明」は、主に西欧諸国のポピュラー音楽の歌詞を、移民や人種、反体制運動などとの関連において検討した。さらに平成18-20年度の基盤研究(B)「20世紀における恐怖の言説」は、主に社会的な弱者の恐怖意識を取り上げるものであった。その最終年度の2008年9月、

ミレーユ・キャル＝グリユベール氏（パリ第3 大学教授、カナダ・ロイヤル・ソサエティ会員）をはじめ国内外の研究者を招聘して、国際シンポジウム「恐怖からの思考」を開催し、そこでは、アラブ系ユダヤ人、中国ウイグル族、不審者、犯罪者、不協和音の音楽といったマイノリティ状況が、発表や討議の重要なテーマの一つになった。

また 2007 年 11 月、日本学術振興会とフランス国立科学研究センター（CRNS）の助成を受けて、ストラスブール大学のアラン・ビール教授を中心とする研究グループと、棚沢直子氏・松本伊瑛子氏を中心とした日本の研究者グループ（田所光男、布施哲、鶴巻泉子も参加した）が共同で、日仏二国間セミナー「グローバル化で変化する日仏の国家アイデンティ、ジェンダー関係、社会格差」を名古屋大学において開催した。ここでもまた、グローバル化という一元化、均質化が進行する現代世界における、政治的極右、地域音楽、女工、高学歴専業主婦、といった多様なマイノリティ状況が発表と討議の対象となった。その成果は同名の論文集に結実している。本共同研究の代表者と分担者は、こうした国内外の研究者との協力関係のもとで進めた研究活動を通して、現代世界の多様な領域に現出するマイノリティ状況に認められる共通の問題を検討する必要性を認識するに至ったのである。

2. 研究の目的

ユダヤ人と障害者とは、一般常識でも研究世界の了解でもふつうは別々の話題やテーマの中にある。しかし、キリスト教社会の中のユダヤ人、健常者の中の障害者というように、周囲との関係性に注目すると、自覚的に共同体を形成しているか否かに関わらず、その全く異質の差異がどちらも未熟や欠損、あるいは危険だと見られて、両者ともにこれまで全体社会の一人前の構成員としては認知されてはこなかったという共通の状況が見えてくる。そして現代世界において特徴的なことは、その共通の状況が、人種差別主義のような、単なる差別や排除を肯定する原則の下だけではなく、全体の共生を積極的に保証し、推進しようとする制度や理念の下でもしばしば生じていることである。

本共同研究は、全体社会の中で特別な差異のために多かれ少なかれ二級構成員とみなされている少数者の状況を〈マイノリティ状況〉と捉え、20 世紀以降の世界の多様な分野におけるマイノリティ状況を解明しつつ、その状況を明示的あるいは暗黙のうちに規定する多様な共生言説の問題性を検討することを目的とする。私たちは、今回のこの共同研究を、今後、比較マイノリティ学を構築するための土台作りと認識している。

3. 研究の方法

特定のマイノリティ集団を対象にした研究は、文学でもそれ以外の分野でも行われており、優れた成果も発表されている。しかし本研究グループは、自覚的な集団形成の有無に関わらず、広く現代世界に生じているマイノリティ状況の共通の問題の大きさに注目するのであり、とりわけ、共生などは求めないジェノサイドなどの特別なケースよりは、むしろ同化や統合など共生を積極的に推進しようとする方向における差別や排除の問題を考察することで、20 世紀以降の文明状況の解明に寄与できるのではないかと考えたのである。

日本語のほか、中国語、英語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語という現代世界の主要な言語の文学的テキストを核にして、政治上の宣言や各種法律、ジャーナリズムの文章、ポピュラー音楽の歌詞や映画のシナリオなど、広範なテキストを対象にとって、以下の二方向での考察を行った。

(1) 多様なマイノリティ状況の解明

20 世紀以降の世界において、明確な共同体意識をもっている集団から、外部からカテゴリー化されるにすぎない集合体まで、特別の差異のために、多かれ少なかれ二級的な構成員とみなされるマイノリティの、差異意識、被差別意識、連帯意識、またマジョリティや他のマイノリティに対する意識を、次の2 部門 13 領域において解明する。

①民族的マイノリティ状況：人種、先住、移住、言語、トランスナショナル、ディアスポラ

②非民族的マイノリティ状況：障害、年齢、職業、階級、宗教、文学、音楽

(2) 顕在的あるいは潜在的な共生言説の検討

20 世紀以降の世界におけるマイノリティ状況の特徴の一つは、単純な差別や排除という伝統的な形態をとるばかりではなく、少数者を全体に組み入れて共生することを積極的に目指す制度、法律、道徳、宣言、理念の下でも生じていることにある。従って、自由、平等、友愛、同化、統合、少数意見の尊重、多文化主義、福祉、などといった共生言説の検討が重要になる。とりわけ多数者が自明としている価値や制度の相対化には力を注ぐ。

4. 研究成果

(1) 広範なマイノリティ状況の総合化。

ジャン＝ポール・サルトル「ユダヤ人問題についての考察」（1947 年）はユダヤ人を定義しようとして、人種・歴史・宗教・言語などの固有性や特殊性はとらずに、非ユダヤ人が差し向ける否定的な視線にその核心を捉えた。これはユダヤ人理解として不十分であ

ると批判されることもあるが、本研究はこれをいわば公約数として活用し、共同体意識の明確な少数民族から、個人個人は孤立しているものの外部からは一つのカテゴリーに入れられる障害者までを対象にしえた。

エスニック・マイノリティの多様性を総合しようとする試みは、例えば、リヨン・カトリック大学の研究グループ等が精力的に推進しているが、そうした動向に対しても、エスニック・マイノリティと社会的マイノリティ・芸術的マイノリティを一つの視野に置いた本共同研究は、斬新な地平を開くことができたと判断する。今後この方向を一層推進することで、比較マイノリティ学という新しい研究領域を開くことができると考える。

(2) 特殊と普遍それぞれの言説の相対化。

特定のマイノリティ＝マジョリティ関係を対象にする時、往々にしてその特殊性や個別性が強調されがちであるが、複数のマイノリティ＝マジョリティ関係を比較検討した本研究は、個々のマイノリティについて語られる特殊性、個々のマジョリティが体現しようとする普遍性、それぞれの議論を相対化するのに貢献できた。また、ある作家の作品をユダヤ文学という枠組みで語るべきなのかそれともフランス文学としてなのか、という論争も、そのまま、「障害者の文学」という枠組みの妥当性をめぐる議論と連動させて考察することが可能になり、この点でも、マイノリティについての語り方、捉え方をめぐる古くからの議論に新しい視野を提供できた。

(3) 学際的国際的研究誌『比較マイノリティ学』を第4号まで刊行。

文学と非言語芸術、あるいは文学と社会・政治との関係への注目という方法は、比較文学の領域ではこれまでも優れた研究を産み出し、本研究代表者が組織してきた三つの共同研究もその方向を進んできた。今回の共同研究も、文学を専門にする研究者を中心に、近接領域である言語学・社会学・政治学の専門家をメンバーに加え、映画・音楽・哲学・社会・政治を一望の下に収めようと試み、学際的なインパクトをもたらすことができた。その成果の具体的な形は、『比較マイノリティ学』という研究誌に現れている。

本共同研究は、現代世界における主要なマジョリティ言語を対象にできる態勢を整え、また、韓国・中国・マレーシア・モーリシャス・フランス・ポルトガル・米国の大学の研究者と連携して、国際シンポジウム『マイノリティ状況と共生言説』や研究セミナー、講演会等を開催した。そこには、研究代表者の所属機関の博士後期課程の修了生や在学学生も参加し、私たちは、今後の研究の展開を担える人材の育成にも力を入れた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 31 件)

- 1) 田所光男「Une théorie possible des relations entre anciens et nouveaux basée sur la notion de "minorité temporelle"」、『比較マイノリティ学』、第4号、159-168頁、2013年、査読なし。
- 2) 藤井たぎる「ルルという名の欲望—資本制と愛のマイノリティ状況—」、『比較マイノリティ学』、第4号、69-81頁、2013年、査読なし。
- 3) 布施哲「「本源」について—わたしたちの政治経済学のための予備的考察—」、『比較マイノリティ学』、第4号、83-91頁、2013年、査読なし。
- 4) 柴田哲雄「国家的危機における優生学—永井潜と潘光旦—」、『比較マイノリティ学』、第4号、53-68頁、2013年、査読なし。
- 5) 田所光男「比較マイノリティ学の構築に向けて」、『比較マイノリティ学』、第3号、111-116頁、2012年、査読なし。
- 6) 田所光男「マイノリティの多義性」、『比較マイノリティ学』、第2号、91-98頁、2011年、査読なし。
- 7) 藤井たぎる「Tonality as "the object-cause of desire"」、『芸術におけるオリジナリティとフェイク』(アメリカ合衆国バトラー大学における愛知県立芸術大学と名古屋大学国際言語文化研究科の大学間連携事業についての報告)、83-93頁、2011年、査読なし。
- 8) 藤井たぎる「ルルという名の貨幣」、愛知県立芸術大学音楽学部音楽学コース『ミクスト・ミュージック』、83-93頁、2011年、査読なし。
- 9) 田所光男「比較マイノリティ学に向けて」、『比較マイノリティ学』、第1号、1-5頁、2010年、査読なし。
- 10) 柳澤民雄「ロシア語の文の成分」、『国文学 解釈と鑑賞』、第75巻第7号、135-140頁、2010年、査読なし。
- 11) 藤井たぎる「モーツァルトのダ・ポンテ三部作における恋愛技法」、国際シンポジウム『戯れのテクノロジー』、90-99頁、2010年、査読なし。
- 12) 水戸博之「現代ラテンアメリカにおけるカトリシズムの諸相(1)」、『言語文化論集』、第XXXI巻第2号、113-124頁、2010年、査読なし。
- 13) 長畑明利「はるか彼方の土地から先祖たちが呼ぶ声—エスニシティの抑圧と顕現」、『現代思想』、2010年5月臨時増刊号、115-123頁、2010年、査読なし。
- 14) 長畑明利「エズラ・パウンドの「原語主義」—The Japan Times 寄稿記事に見るフ

エノロサ草稿の発展」、言語文化研究叢書 9 『言葉と文化の国際交流』、1-18 頁、2010 年、査読なし。

15) 布施哲「晩期の知、知の晩期—シュンペーターの“終末論”をめぐって」、『思想』、2010 年 2 月号、20-41 頁、2010 年、査読なし。

16) 鶴巻泉水「誰に向けて発信するか」、『アジア研ワールドトレンド』、第 16 号、8-10 頁、2010 年、査読なし。

17) 鶴巻泉水「少数言語と新しい地域主義をめぐって—ブレイス語の場合—」、言語文化研究叢書 9 『言葉と文化の国際交流』、173-186 頁、2010 年、査読なし。

18) YANAGISAWA Tamio “Abkhaz Text (7): How the king’s daughter turned into a boy (II)”, 『言語文化論集』、第 XXXI 卷第 1 号、193-219 頁、2009 年、査読なし。

19) 柴田哲雄「汪精衛南京政府下の大東亜戦争博覧会」、森時彦編『20 世紀中国の社会システム』(京都大学人文科学研究所現代中国センター)、95-112 頁、2009 年、査読なし。

[学会発表] (計 17 件)

1) 田所光男「〈時間的マイノリティ〉に基づく新旧関係論の可能性」国際シンポジウム『マイノリティ状況と共生言説 III』、2013 年 3 月 11 日、名古屋大学。

2) 柴田哲雄「国家的危機における優生学—永井潜と潘光旦—」、国際シンポジウム『マイノリティ状況と共生言説 III』、2013 年 3 月 12 日、名古屋大学。

3) NAGAHATA Akitoshi “Rereading Wallace Stevens in the 1930s”, Revisiting the 1930s in American Literature and Culture, 11 March 2012, 名古屋大学

4) 田所光男「比較マイノリティ学の方法論—三つのマルチニック小説を題材に」、日本比較文学会中部支部第 32 回中部大会シンポジウム『20 世紀のマイノリティ表象を読み解く—エスニシティ・異界・ジェンダー—』、2011 年 11 月 26 日、名古屋大学。

5) FUJII Tagiru “Tonality as “the object-cause of desire””, Fire of desire: An “East meets West” symposium of lectures, concerts, seminars and presentations, Indiana University,, 14 November 2011.

6) FUJII Tagiru “Genuine and fake in arts”, Fire of desire: An “East meets West” symposium of lectures, concerts, seminars and presentations, Butler University, 11 November 2011.

7) NAGAHATA Akitoshi “Tender Buttons as Poetry of Mock-Explanation”, Dialog on Poetry and Poetics: The 1st Convention of Chinese/American Association for Poetry and Poetics, 30 September 2011, 華中師範大学

8) NAGAHATA Akitoshi “Revisiting the Fenollosa Manuscripts in The Japan Times: Pound’s Language of Nostalgia and the International Affairs”, The 24th International Ezra Pound Conference, 7 July 2011, University of London

9) 田所光男「比較マイノリティ学の構築に向けて」、国際シンポジウム『マイノリティ状況と共生言説 II』、2011 年 3 月 7 日、名古屋大学。

10) 布施哲「現代のアソシエーション理論—エルネスト・ラクハウの“ラディカルな民主主義について”—」、国際シンポジウム『マイノリティ状況と共生言説 II』、2011 年 3 月 8 日、名古屋大学。

11) 藤井たぎる「芸術の境界」、『境界の消失と再生：現代音楽の諸相—シンポジウム・トークコンサート・ワークショップ』、愛知県立芸術大学、2010 年 12 月 4 日。

12) NAGAHATA Akitoshi “An Idea of Order in the Confucian Ethics: The Father-Son Relationship in Pound’s “Chinese History Cantos””, 3rd International Conference “Modernism and the Orient”, 9 June 2010, 三台山荘 (中華人民共和国杭州市)

[図書] (計 7 件)

1) 柳澤民雄『ニューエクスプレス・スペシヤル ヨーロッパのおもしろ言語』、共著、町田健監修、白水社、8-27 頁執筆、2010 年。

2) TSURUMAKI Motoko *La subjectivité journalistique*, Éditions de l’EHESS, 2010, 総 315 頁。

3) YANAGISAWA Tamio *Analytic Dictionary of Abkhaz*, ひつじ書房、2010 年、総 635 頁。

4) 柴田哲雄『中国と博覧会—中国 2010 年上海万国博覧会への道—』、共著、成文堂、2010 年、総 133 頁。

5) 田所光男『ハーンの文学世界』、共著、平川祐弘・牧野陽子編、新曜社、2009 年、総 672 頁。

6) 柴田哲雄『協力・抵抗・沈黙』、成文堂、2009 年、総 448 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田所 光男 (TADOKORO MITSUO)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：40179734

(2) 研究分担者

柳澤 民雄 (YANAGISAWA TAMIO)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：80220185

藤井 たぎる (FUJII TAGIRU)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
教授
研究者番号：00165333

水戸 博之 (MITO HIROYUKI)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
教授
研究者番号：80262921

長畑 明利 (NAGAHATA AKITOSHI)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
教授
研究者番号：90208041

布施 哲 (FUSE SATOSHI)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
教授
研究者番号：60345840

鶴巻 泉子 (TSURUMAKI MOTOKO)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
准教授
研究者番号：70345841

柴田 哲雄 (SHIBATA TETSUO)
愛知学院大学・教養部・准教授
研究者番号：90350933

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

アンヌ・ラリュ (ANNE KARUE)
パリ13大学 (フランス)・教授

マルク・コベール (MARC KOBER)
パリ13大学 (フランス)・准教授

ハスエリドン (HASIEERDUN)

内モンゴル大学 (中国)・准教授

ウォン・ガンリン (WONG NGAN LING)
マラヤ大学 (マレーシア)・上級講師

磯部 美里 (ISOBE MISATO)
愛知大学・非常勤講師

高 峽 (GAO Xia)
日本学術振興会・研究員

竹内 愛 (TAKEUCHI AI)
中京大学・非常勤講師

姜 信和 (KAN SHINA)
愛知淑徳大学・非常勤講師

張 雅婷 (CHANG Ya-Ting)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
博士候補研究員

イザベル・ピロドー (ISABELLE BILODEAU)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
博士後期課程学生

加野 泉 (KANO IZUMI)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・
博士後期課程学生